

Title	第10講 グローバル・クライシスの時代
Author(s)	福田, 州平
Citation	GLOCOLブックレット. 2013, 12, p. 109-118
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48308
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

第10講

グローバル・クライシスの時代

1. 9.11から3.11へ

前回は、サステナビリティ・サイエンスの登場の背景も踏まえながら、近代国家と密接な関係にある工業化の行き詰まりと、それを乗り越えるためのキーとなりそうな「想像されない共同体」の存在についてお話ししました。今回は、現在生じている世界的な危機状況(グローバル・クライシス)について、もう少し掘り下げてお話ししたいと思います。

現代の問題を考えるには、その直前の事情を踏まえなければなりません。現代は、過去から切り離された存在ではありません。さまざまな積み重ねがあるはずで、そこで、まず、20世紀の話から入ります。

20世紀は、「戦争の100年」といわれています。つまり、二つの世界大戦があり、そして40年以上もの冷戦がつづいたからです。冷戦中は、「核抑止力戦略」が、世界を動かす論理の一つだったといっても過言ではありません。「平和依存」、「多極化」といったことが冷戦時代に叫ばれ、核実験・核拡散防止、軍縮交渉などがみられましたが、核抑止戦略は東西関係を拘束し続けました。このため、冷戦時代、アメリカとソ連が正面切ってぶつかり合う、第三次世界大戦は結局起きなかったといえます。しかし、全面戦争が回避されただけで、ヴェトナム戦争などの地域紛争は生じており、ジョン・ルイス・ギャディスが唱えるような「長い平和(Long Peace)」（ギャディス 2002）と冷戦を位置付けることはできません(河内 2011: 10)。

では、その冷戦も1989年12月のマルタ会談を契機として終わってしまいました。それによって、世界はどうなったのかといいますと、グローバル化が生まれました。グローバル化について、それ自体は1970年ごろから見出すことができます。しかし、冷戦終結後に、ヒト、モノ、カネ、情報の流動化が世界規模で起きていることはまちがいないと思います(河内 2011: 11)。このグローバル化には光と影があります。光とは、企業活動を世界規模で行えるようになり、また遠くのモノや情報を座して得ることができるようになり、その恩恵をすくなくからぬ人々が享受していることです。そして、思想面では、グローバルな経済の事実上の存在を高く評価し、他方で管理機構としての国家(政府)の役割を低く見積もる「超グローバリスト」と呼ばれる人々も登場しました(原

田 2001)。

光が強ければ強いほど、影の部分は濃くなります。超グローバルリストたちは、市場の失敗＝企業の失敗の深刻さに対する認識を欠き、かつ消費者のパワーを過大評価していると指摘されています(原田 2001)。彼らの主張は、事実を捉えるうえでかなり問題があるのかもしれませんが、彼らの主張は健在ですし、フォロワーがいます。また、アメリカにおけるグローバル化の信奉者たちは、市場原理を中心とし、「小さな政府」、規制緩和など柱とする新自由主義とむすびついてしまいました。これが、アメリカのブッシュ Jr. 政権を支えた政治的思潮のひとつです。そして、彼らの政策は、福祉削減、所得格差をもたらし、「ワーキングプア」と呼ばれる非正規労働者を生み出しました。現在、世界は新自由主義の矛盾に翻弄されているといってもよいのかもしれませんが。この矛盾のなかで生じたのが、2007年夏に表面化したサブプライム・ローン問題であり、そして2008年のリーマン・ブラザーズ破たんにはじまる金融危機でした(河内 2011: 11)。

冷戦が終わったことは、グローバル化の時代の到来を意味し、そして、21世紀においては、その大きな歴史のうねりのなかに人々は漂っているといえます。しかし、注意せねばならないことは、冷戦はその終わりその後で、時代をすっぱり切り分けることは厳密にはできないということです。なぜなら、危機の根源は、冷戦時代に始まっているものも少なくないのです。たとえば、原子力発電所の問題を考えてみれば、懸案の福島原子力発電所は、冷戦中の1967年に着工が始まっています。

さて、2001年9月11日から2011年3月11日に至るまで、「世界的な危機」とでもいうべきものはいくつもございました。それらをいくつかリストアップしてみましょう。

2001.9.11	9.11事件。以後、アフガン攻撃(10.7)、イラク戦争(2003.3.19)へ。
2007.8.15-16	サブプライム・ローン問題による世界同時株安。
2008.9.15	リーマン・ブラザーズ経営破たん。
2009.6.11	WTO、新型インフルエンザ警戒水準を「フェーズ6」に引き上げ。
2011.3.11	東日本大震災。被災地復興と福島原発の事故が問題に。

このほかにも、明確な事件として形にはあらわれていませんが、環境問題(温暖化、砂漠化など)は深刻な状況にあるといわれていることも忘れてはなりません。こうした世界的な危機、世界的な難題にわれわれは直面していま

す。世界的な危機・難題を考えると、その多くが近代化の産物であり、グローバル化の産物でもあるという点を見失ってはならないと思います。そして、さらに重要なことは、現実と言語(対応)が乖離しているということです。著名な社会学者、ウルリッヒ・ベックは、これを「世界リスク社会」と呼んでいます(ベック 2010)。

2. 世界リスク社会

ウルリッヒ・ベックは、1944年に生まれたドイツを代表する社会学者です。ベックは、チェルノブイリ原発事故の年に刊行された *Risikogesellschaft* (『危険社会』)の著者として有名です。難しい本なのですが、ベストセラーになりました。現在でも精力的に研究をされており、学会だけでなく、ジャーナリズムにも影響がある方です。

今日は、ベック(2010)でとりあげられた興味深いお話の紹介からはじめたいと思います。アメリカ議会がある科学委員会に、放射性廃棄物の最終処理場の危険性を説明できる言語、もしくは記号を開発するように要請したという事例です。この要請は、「1万年後に生きている人たちに、同じメッセージを伝えるための概念や記号は、どのようなものでなければいけないのか」というものだったそうです。委員会は、物理学者、人類学者、言語学者、脳科学者、心理学者、分子生物学者、考古学者、芸術家などから構成されていました。

まず、委員会が直面した問題は、「1万年後もアメリカは存在しているのか?」でした。しかし、この答えは委員会にとって当然至極のものであった。つまり、「アメリカ合衆国は永遠である」と。本当にそうかなと個人的には思うのですが、それは置いておきましょう。

では、1万年後の未来人とは、どのような人たちなのでしょう。現代ではつかみようがありません。そこで、委員会は、どうやってメッセージを伝えるかということを考えました。考えるにあたって、人類が残したもっとも古い記号に手本をもとめました。ストーンヘンジ、ピラミッド、あるいはホメロスや聖書の受容の歴史を研究したそうです。そして、これらの記録の寿命について説明がされたのですが、根本的な問題がありました。なぜなら、調べたものは、せいぜい、数千年前までしかさかのぼれないのです。一万年に及ぶようなものはなかったのです。

その後、ドクロを記号として使うという案がでました。しかし、これは、さまざまな解釈を呼ぶことがわかりました。つまり、錬金術師にとっては、再生の象徴です。また、心理学者がおこなった実験によると、ドクロの印を瓶に張り付けると、子供たちは「毒」と不安そうに叫び、同じ印を旗につけると「海

賊だ」といって喜んだそうです。

そこで、あらゆる種類の警告が含まれるセラミックと鉄と石のプレートをつくり、文字通り、最終処分場の周りの土地をそれで舗装するという案ができました。けれども、言語学者たちによれば、「最長でも2000年しか理解されない」ということで見解が一致してしまいました。

この事例でベックは何が良かったのかというと、「一定の技術を利用するために私たちが世界にはなった危険を将来の世代に伝えるという課題に対して、われわれの言語は応えてくれない」(ベック 2010: 26)ということなのです。現代の世界では、数量化可能なリスクを扱う言語と、数量化できない不確実性の世界との隔たりがきわめて大きいと、ベックさんは指摘しています。核エネルギー、遺伝子工学、ナノテクノロジー、コンピューター科学などの利用について、それをどうつかうか、どういったところにどのような技術を用いた施設をつくるかは、現在のわれわれが決定しています。しかし、それが、予見できず、制御不可能な結果をもたらしてしまう。そして、地球上の生命を危険にさらしていると、ベックさんは主張しているのです。現在社会に限らず、すべての社会、すべての人間、すべての時代がいつも危険にとりまかれています。

ベックは、「リスク」を近代の概念だと主張しています。リスクとは、文明社会における予見できない結果を、予見可能、制御可能にするようにするよう試みることです。しかし、現代の「世界リスク社会」は、文明社会の決定によって、結果として、地球規模の問題や危険を巻き散らし、私たちはしばしば大惨事を目撃しています。これは、原発事故ですとか国際テロ、金融問題、環境問題などの世界的な危機をコントロール可能だとする言説とはまったく相容れないものです(ベック 2010: 27-28)。

3. リスクの誕生と近代

危険とリスクを、整理しておきましょう。同じようなコトバと思う方がいらっしやると思いますが、実は両者は違うものです。まず、危険(danger)とは、外からくるものというふうと考えられます。たとえば、みなさんがライオンの生息地に住んでいるとしましょう。ライオンの生息地に住んでいるわけですから、ライオンと出くわすことがあります。そのとき、今まさにライオンが襲ってくるのが危険です。それに対して、その危険をどのように予測し、どのように対処しようとするのがリスクです。先ほどの例でいえば、ライオンがどこにいるのか、やってくるとしたらいつぐらいか、そしてやってきた場合、どうやって逃げようか、と考えるのがリスクです¹。そして、ベックが指摘するように、リスクはきわめて近代的な概念です(ベック 2010: 27)。

リスクとは、もともとイタリア語のriscoに由来するといわれています。riscoは、「危険に陥る」の意味だそうですが、「絶壁の間を航行する」が原義みたいです。16世紀、ヨーロッパでは遠隔地貿易が盛んになりました。当時、陸上は、土地は封建制のもと、つよい規制がかけられていたのに対して、海上は「自由」で、自由な企業活動ができました。しかし、「絶壁の間を航行する」のは、非常に危ないわけです。せっかく積んだ荷物も、嵐にあって船が座礁したら、元も子もありません。ここででてきたのが、海上保険です。遭難などの事故で損害が出た場合の補償をするようになりました。その際、補償を考える用語として、「リスク」という言葉がでてきたといわれています。ここでは、危険とは、嵐や天候不順、あるいは暗礁といった天災などは、社会の外部にあるものと考えられていました(中部高等学術研究所共同研究会 2004: 4)。

こうして時がたつにつれて、徐々にリスクの観念が整備されていきました。そんななか、大事件が発生しました。1755年に発生したリスボン大地震です。この地震の死者の数は、正確なところは研究者によって分かっているらしく、1万5千人説、3万人説、そして10万人説があるそうです。ともかく、たくさんの人々がなくなったということは事実です。この大地震は、当時のヨーロッパに非常に大きな衝撃を与え、思想的な事件ともなりました。ライプニッツ、ポルテール、ルソー、カント、そしてアダム・スミスといった、18世紀ヨーロッパを代表する知性は、リスボン大地震に関して、いろいろな論考やコメントをのこしているそうです。人間愛的なものの方、これは天災ではなく人災だとする見方、人間が自然に順応すべきだという見方、シンパシーの及ぶ範囲についての考察など、さまざまな意見ができました(中部高等学術研究所共同研究会 2004: 5-14)。

いずれにせよ、リスボン大地震は、災害を神に関係づける議論から人間世界の問題として取り扱う方向への移行を示す契機となりました。ベックさんは、朝日新聞のインタビューでこう語っています。「18世紀にリスボンで大地震が起き、深刻な被害がでたとき、当時の思想家たちは、どうして善良な神がこんな災害をもたらすのかと考えた。今日、神を問題にするわけにもいかず、産業界などは自然を持ちだすのです。しかし、そこに人間がいて社会があるから自然現象は災害に変わるのです」(ベック 2011)。私たちは、近代社会を生きるなかで、外部として自然現象などを追いやることでリスクを考えてきたのですが、このためにかえって、制御不能な事態に直面しているというわけです。

¹ 危険とリスクの解釈については、中部高等学術研究所共同研究会(2003)に収録されている長島信弘のコメントより示唆をえた。

4. 世界リスク社会の3つの次元

ベックは、現在の私たちが生きている世界リスク社会には、生態系の危機、世界的な金融危機、同時多発テロネットワークによるテロの危険性の3つの次元があると整理しています(ベック 2010: 29)。その整理にしたがって、お話を付け加えながらご紹介したいと思います。

4.1 生態系の危機—生物多様性と地球温暖化の問題—

まず、ベックが指摘するのが、生態系の危機です。とりわけ、生物多様性の問題と地球温暖化の問題は、世界的に議論されています。まず、生物多様性ですが、日本の環境省の定義によれば、「生きものたちの豊かな個性とつながりのこと」を意味しています。生物多様性条約という国際条約があるのですが、この条約では、生態系の多様性、種の多様性、遺伝子の多様性という3つのレベルで多様性を考えています(環境省 2013a)。こうした考え方に對して、「自然」だけでなく、「命」の多様性のことであるとする考え方もあります。この考え方に従えば、先住民あるいはマイノリティも視野に含まれ、英語の biodiversity は「生物多様性」ではなく、「生命の多様性」になります²。

他方、これまた環境省の定義によれば、地球温暖化とは、「人間の活動が活発になるにつれて『温室効果ガス』が大気中に大量に放出され、地球全体の平均気温が急激に上がり始めている現象」(環境省 2013b)です。WWFのホームページをみてみますと、2007年、北極の海氷が観測史上最小を記録し、今後100年以内にホッキョクグマが絶滅する可能性があるといわれているそうです。また、1～3度の気温上昇によって絶滅する可能性がある野生生物種がいるといわれているそうです。さらに、地球温暖化によって、台風、ハリケーン、旱魃などの異常気象が増えるといわれているそうです(WWF 2009)。こうしたことから、世界的にかなり懸念されている問題です。

地球温暖化と生物多様性の問題、つまり生態系の危機は、グローバルなリスクにほかなりません。しかし、地球温暖化を問題視することについて、懐疑的な見方もあることは、みなさんもご存知だと思います。懐疑論に対して、「後悔しない政策」を基本方針として採用すべきという見解もございます(及川 2005: 228-230)。生態系の問題について、科学的見方とそれに依拠した「認識」の違いがあって、なかなか判断しがたい状況にございます。

2 越田(2009)に記録されている日本平和学会2008年度秋季大会での武者小路公秀の報告要旨を参照。

4.2 世界的な金融危機

つぎにベックが指摘するのが、世界的な金融危機です。「リーマン・ショック」は、みなさんもまだ記憶に新しいかと思います。2007年夏ごろ、アメリカで住宅バブルがはじけ、信用度の低いサブプライム・ローンの返済がむつかしくなっていました。このため、サブプライム・ローンを組み入れた金融証券の信用保証が危機的状況に陥ってしまいました。2008年に証券業界第4位のリーマン・ブラザーズは破綻してしまい、世界的な金融危機が訪れました。リーマン・ブラザーズの破綻後、わずか半年あまりの間にアメリカ5大証券会社が消滅し、さらには世界最大保険会社AIGも経営危機になってしまい、政府管理下におかれました。これを、「マネー資本主義」の破綻と捉えることができます(河内 2011: 15-16)。

こうした状況の背景には、金融の自由化と金融工学の発達が多く絡んでいます。金融工学は、経済学・会計学・工学・数学などを駆使した数理ファイナンスに基づいているそうです。そして、投資銀行における企業価値の測定、機関投資家の最適投資戦略、不動産担保証券のプライシング(価格決定)、デリバティブ取引に用いられているそうです。金融工学は、世界の金融市場に膨大な証券化商品を生み出しました。金融工学に基づく証券化は、リスクの分散化、多様な流動性、組み合わせの自由度などのメリットがあるそうです。しかし、構造を細分化・複雑化させ、リスクの大きさを把握することが困難になるというデメリットもありました。デリバティブは、金融リスクを回避するために開発されたものなのですが、価格変動を回避できず多額の損失を生み出してしまうほど「怪物化」してしまいました。そして、制御不能事態を世界各地にもたらしたのです(河内 2011: 16-18)。

4.3 同時多発テロネットワークによるテロの危険性

9.11事件の影響は、アメリカにとって非常に大きいようです。2009年にある世論調査会社がアメリカ人に「この10年をあらわす一言」を聞いて回ったところ、回答者の約8割が「テロ」と答えたそうです³。テロリストがネットワーク化し、それが危険だといわれています。もっとも、以前講義で扱いましたように、こうした情報はかなり精査せねば、見当違いの結果しか生み出しません。

いずれにせよ、テロが隆盛を迎えたということは、科学技術の発展と戦争の「個人化」でもあります。近代国民国家の成立には暴力の国家による独占という要素があるのですが、9.11事件などから国家による破壊兵器の独占が破綻したと捉える人もいます。それが事実として正しいかどうかはなんともいえ

3 この世論調査の概要については、福田(2011)に詳しい。

ません。しかし、国家はそれをとても懸念している。そのため訪れたのが、誰もが潜在的な「テロリスト」とみなされる時代です。最近、空港の検査装置の性能がかなり上がったのもそのあらわれでしょう。この時代では、絶えず自分が危険な人物でないことを提示しつづけなければなりません。そして、「安全のため」管理することを甘受せざるをえなくなりつつあります(ベック 2010: 38-40)。

重要なことをつけくわえたいと思います。しばしば9.11事をはじめとするテロ事件では、被害者が先進国にのみ存在すると思われがちです。しかし、9.11事件から対テロ戦争の時代は、被害者も加害者も世界各地に偏在しているのです。他方、対テロ戦争は、不思議なパラドックスをもっています。国家が潜在的なテロリストである市民からの危険を取り除くために、国家間協力をすすめているとみることができるのです。これは、いきつくところ、ベックが指摘するように民主主義の死ともいえます(ベック 2010: 40)。

4.4 誰もが危機にさらされている

こうした問題は、グローバルな政治共同体を生み出すと共に、その問題のあらわれ方に地域差があります。環境の温暖化の被害が少ないところもあるでしょうし、金融危機の影響が軽微だったところもあるでしょう。あるいは、テロの被害がほとんど考えられない国もあるでしょう。しかし、こうした世界規模の危機の作用の仕方や現れ方が異なっても、「原則的には誰もが危険にさらされている」(ベック 2010: 32)と、ベックさんは指摘しています。

問題解決のために、ではどうすればよいのか? 無論、グローバルな政治的努力が必要となるでしょう。しかし、温室効果ガス規制に関する国際会議でよくみられるように、先進国と途上国の対立があったりするでしょうし、あるいは受益者と受苦者の対立といったこともありえます。ですが、短気になって、戦争をして解決となつては元も子もありません。環境を守るために戦争を行うなんてことは、あってはなりません。戦争は環境破壊をもたらす行為にほかなりません。平和的手段、つまり交渉によるグローバルな解決を目指すべきです。

ですが、ベックは、「世界リスク社会の挑戦に対して、ただひとつの答えがあると断言しているわけでは決してありません」(ベック 2010: 33)と明言しています。世界リスク社会に至った道は、地域によって異なるわけだから、そこから抜け出す道も多様だと、ベックさんはいっているのです。確かに、唯一の回答を押し付けて、すべての国家にそれを強いることは、歴史的にもよい結果をもたらしたとはいえませんので、地域の歴史的経緯や文化的文脈にそった抜け道を見出すことが重要なかもしれません。

ともすれば、こうした危機に直面して、私たちは取り乱してしまうかもしれ

ません。しかし、ベックはこういっています。「自分が危険にさらされていることについて、たえず語り合うことによってのみ、自らを保つことができるのだ」(ベック 2010: 34)と。まずは、語り合うことから始めなければならないと思います。

5. 知のペシミズム、意志のオプティミズム

東日本大震災そしてその後の福島第一原発の問題は、まさにベックのいうような世界リスク社会を象徴的にあらわしています。東日本大震災では、Twitter、FacebookなどのSNSが情報ツールとして有用に使われ、注目をあつめました。震災で携帯電話などが機能しない状態でも、Twitterがつかえたという話もききます。情報ツールとして非常に便利な反面、根拠のないデマがTwitterのリツイートなどによって拡散してしまうということもおきました。

世界リスク社会のなか、わたしたちには物事を判断することが難しい状況です。寺田寅彦は、「ものをこわがらな過ぎたり、こわがり過ぎたりするのはやさしいが、正当にこわがることはなかなかむづかしい」(寺田 1993: 258)というコトバを、随筆に残しています。私たちが住む近代社会は、私たちがどう怖がっているのかもわからないものを作り出し、そしてそれを拡散させてしまったのです。

ですが、悲観的になってはいけなとも思います。アントニオ・グラムシは、知のペシミズム、意志のオプティミズムというコトバを残しています(片桐編 2001)。世界リスク社会からの脱出のためは、意思のオプティミズムにたつて、私たちは、語りつづけなければいけないと思います。

私もここで、意志のオプティミズムに立ちたいと思います。かつて、キューバ危機という事件がありました。アメリカとソヴィエトが核戦争寸前までいった事件です。しかし、そこから何とか人類は核戦争の危機を回避しました。人類には、断崖絶壁の端まですすんで、ここからあと一歩進んだら奈落に陥るといふときに、うまく崖のふちから返った歴史があるのです。こうした状況を、原彬久先生は、「反転の平和」とおっしゃっております(原 1993: 222-230)。

いま、もう一度「反転の平和」のタイミングが訪れているのかもしれませんが。しかし、反転するにも、どちらのほうに返るのかという問題があると思います。うっかり、崖から落ちてしまうような方向に足をふみだしては大変です。そのための方向は、どちらなのでしょう。

方向をさぐるためには、もっとも弱い人たちへのしわ寄せはないだろうか? 何を「復興」するのか? 「国家」や「経済」が、「人間」の日常の不安よりも優先されすぎではないだろうか? などの問題を検討していく必要があるでしょ

う。多様な議論がもためられているのです。そして、方向のヒントとして指し示せるものとして、次回は人間の安全保障をあつかいたいと思います。

引用文献

及川敬貴

- 2005 「京都議定書と国際協力」加藤尚武編『新版 環境と倫理—自然と人間の共生を求めて』有斐閣、227-254頁。

片桐薫編

- 2001 『グラムシ・セレクション』平凡社。

河内信幸

- 2002 「グローバル・クライシス—危機の広がり連鎖」河内信幸編『グローバル・クライシス—世界化する社会的危機』風媒社、9-28頁。

環境省

- 2013a 「生物多様性とは」(2013年2月4日取得、<http://www.biodic.go.jp/biodiversity/wakaru/about/index.html>)
- 2013b 「温暖化とは」(2013年2月4日取得、<http://www.env.go.jp/earth/cop3/ondan/ondan.html>)

ギャディス、ジョン・L

- 2002 『ロング・ピース—冷戦史の証言「核・緊張・平和」』五味俊樹ほか訳、芦書房。

越田清和

- 2009 「G8サミットからCOP10(生物多様性条約締結国会議へ向けて)」日本平和学会ニューズレター編集委員会編『日本平和学会ニューズレター』18巻3号、8-9頁。

中部高等学術研究所共同研究会

- 2003 『第8回 人間安全保障教育』中部高等学術研究所。
- 2004 『第11回 「人間安全保障」とリスク』中部高等学術研究所。

寺田寅彦

- 1993 「小爆発二件」小宮豊隆編『寺田寅彦随筆集 第5巻』岩波書店、254-260頁。

原彬久

- 1993 『国際政治分析—理論と現実』新評論。

原田太津男

- 2001 「グローバリゼーション論争の現在」『国際研究』17号、111-131頁。

福田州平

- 2011 「現代テロリズム研究の展望」河内信幸編『グローバル・クライシス—世界化する社会的危機』風媒社、89-110頁。

ベック、ウルリッヒ

- 2010 『世界リスク社会論—テロ、戦争、自然破壊』島村賢一訳、筑摩書房。
- 2011 「原発事故の正体」『朝日新聞』5月13日。

WWF

- 2009 「地球温暖化の脅威」(2013年2月4日取得、<http://www.wwf.or.jp/activities/2009/09/721014.html>)